

高山

たかやま
高山の原生林を守る会

会報 第 94 号

2015年 9月



第 141 回観察会～安達太良・烏川自然遊歩道観察会

7月10日(日)に第141回観察会「安達太良・烏川自然遊歩道観察会」が開催されました。11名の参加者でした。今回は烏川遊歩道とくろがね小屋までの通称馬車道と呼ばれる古典的な安達太良登山コースを組み合わせたものでした。溪谷沿いに発達したミズナラ林の中に整備された遊歩道に入ると切り土斜面には多くのシダ植物が生き生きと生育していました。シダの明るい緑が気分をすっきりさせます。コースの中ほどには夏の山岳でよく目立つヤマブキショウマとトリアシショウマが隣接して群生しており、葉の特徴をしっかりと比較することができました。開花しているのはヤマブキショウマだけで、トリアシショウマとは開花期が重ならないことが分かりました。滑床を走る溪谷流が涼を誘い、快適な沢の散策路の出口にさしかかる辺りで、思わぬ森の妖精が私たちの前に現れました。エゾミドリシジミでした。その羽の色はまさに生きた宝石でした。

沢を抜けると一転して乾性の登山道歩きとなります。それでも登山道沿いの切り土斜面には多くの植物が花を咲かせ、予定の倍以上の時間をかけての花観察となりました。松井食堂で昼食後、矢筈森直下のお花畑まで足を伸ばし、高山植物の花々を満喫しました。猛暑に見舞われた夏の1日、たっぷりと安達太良の山岳植物を堪能し、満腹の観察会でした。



夏の溪谷の観察は爽やか

第141回自然観察会 安達太良・鳥川遊歩道の河辺林と夏の山岳植物観察会

伊藤みどり

猛暑日の予報の中、ミズナラの巨木林を鳥川まで下り、川を遡り滝を巡る、奥岳自然遊歩道は最高の納涼コースでした。頭上高く、ミズナラ、トチ、カエデなどの、葉の一枚一枚が微妙に重なり合って大きな緑のドームを作り、あのうんざりする真夏の太陽が、葉っぱの輪郭を浮かせ上がらせたり、透かせたりして、やわらかい木漏れ日となって林床でゆらいでいました。

シダ類について、守さんから情熱たっぷりの講義を受けましたが、ハリガネワラビだけ覚えれば良いとのことで、素直に従いました。(まるい胞子嚢がかわいい)。ヤマブキショウマとトリアシショウマの区別は、葉脈。トリアシショウマの支脈は、葉縁まで辿り着かず、つまり、フラフラ千鳥足とのこと。(覚えやすい) ヒノキ林で出逢ったウスノキの実は、黒く熟しておいしそう。つい、「ベクレルは？」震災以来、身についた悲しい習性。

旧道から馬車道に抜けると、そこは炎天下。道沿いにヨツバヒヨドリ、クロズル、ハナニガナ、シロバナニガナ、ホツツジ、コメツツジ、モウセンゴケ、ヤマトキシソウ。花はやっぱり、お日さまが好きらしい。辛うじて咲き残っている、艶やかなハクサンシャクナゲに「熱中症に気をつけてね」と声をかけてしまう。

くろがね小屋の、太陽光発電パネルの底を見下ろす場所で昼食。ベルトコンベアのように次々と廻ってくる、松井さんたちからの美味しいごちそうの誘惑に負けて、つつい身の程知らずにいただいてしまった。

昼食後、峰の辻に向かう。炎暑のガレ場をジグザグ、よちよち登る。重くなったお腹を抱え、チビチビ水を飲みながら。酒瓶を片手に、大道をふらつく酔っ払いの気分。正直、つらかった。「来なきやよかった」と弱音を吐きそうになったとき、前方で「あつた！」と歓声が上がった。山手の岩陰にひっそりと、でもアッチコッチで「いないないばあ」をしているオノエランの白。谷間には、満開のサラサドウダンとベニサラサドウダン。さらに、ガクウラジロヨウラクのモスグリーンとピンクのパステルカラーが眼下一面に広がって、そのむこうの青い空に溶け込んでいく。

豊かな自然を満喫できる今の平和と高山の原生林を守る会にあらためて感謝感激の一日でした。



アオハリガネワラビ



ヤマブキショウマ



ミズナラ林



緑のノリウツギ



エズミドリシジミ



ベニサラサドウダン



水辺の観察

緑に囲まれて暮らしたいと思い、山を買ってしまった。そして、家を建てた。日々、生活を維持するための作業が、思いのほか多い。雨による土壌流出であり、また、枝葉の繁茂が凄まじく、一年の放置を俟たず通行が不能になる。ことほどの有様である。快適な暮らしとは言えない。当然のことである。受動的な山での暮らし方である。とは言え、山の生き物相は豊だ。この間、私が実感し、意識した山の生き物は、フクロウでありノスリである。そして、悪さをするのが、イノシシやオオスズメバチで招かざる客である。とりわけ、フクロウから受けた印象が、強烈であった。

街暮らしをしていた者が、見たこともないフクロウが夕刻、低空で目前に現われ、音もなく当然の飛行姿に圧倒されてしまった。その光景が、目に焼き付き意識に定着したのだ。

じっと枝に潜んで獲物の動向を見張るのだ。首を回し、動き回るノネズミの物音を察知し、忍者のごとくノネズミを捕らえる体制で地面を滑空するのだ。庭で作業をしている私の存在に気づかずの滑空である。森の忍者と称されるフクロウともあろうものが、目前に姿を現すとは、不覚である。フクロウは、夜に存在を誇示する。鳴き声は神妙である。森の王者に相応しく、森の哲学者でもある。

フクロウの生活史等を調べてみた。世代促進の季節は、繁殖の早春から巣立ちの秋にかけてである。「①早春に繁殖のため巣営地付近で夜に雌雄で盛んに鳴き交わす。②晩春に巣立ち、夏に狩りの訓練と飛行練習、晩秋にかけて独り立ちする。③留鳥として定住性が強く、生態系ピラミッドの頂点に位置する大型の猛禽類の1種である*」と、記載されていた。これまでに消灯後、軒下で二度・三度となく、長時間鳴いていたことがあった。庭で求愛していたのだ。また、庭が捕獲場と化し、無音で目前の餌の出現を待ち構えていたのだ。これは、私の限られた空間での出来事である。

営巣には、フクロウが安らぐ洞が不可欠である。洞を生じる大木の樹林が必須である。里山の維持が重要である。餌の供給とフィールドの確保が、生態系の保全を意味する。

私が暮らす里山での生息数は知らない。以下のイメージ図を作成してみた。「フクロウは、生態系ピラミッドの頂点に位置する猛禽類である*」ため、その個体数の増減が、里山の環境指標になると考えた。

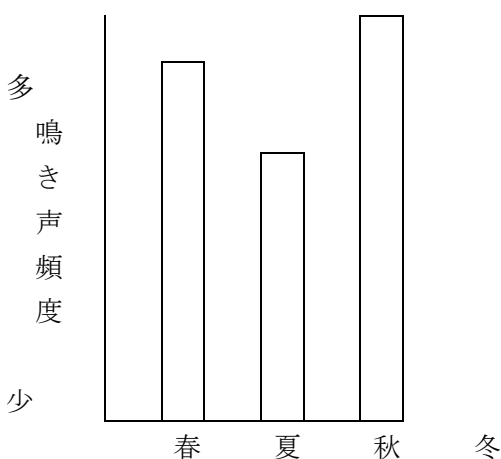


図 四季とフクロウの鳴き声頻度 (イメージ)

注1) 春：繁殖行動

2) 夏：テリトリー維持のための示威行動

3) 秋：子離れを促すため、また冬に備えての捕獲行動の活発化

4) 冬：活動低下

*：ネット「ウィキペディア」でフクロウを参照した。



自宅周辺の里山

左図は、イメージである。鳴き声頻度は、自宅で聞いた記憶に基づいた。

春は、求愛行動が主に頻度を上げる。

夏は、テリトリー維持のための示威行動で頻度を上げる。

秋は、子離れを促すため、また「冬に備えてノネズミを捕獲し、皮下脂肪の蓄え*」のために活動を活発化し頻度を上げる。

冬は、活動の低下による頻度減となる。

今後、数年を掛けて、月ごとの頻度数を記録し、イメージを証明したい。

山の作業には、体力の維持が不可欠だ。楽しい山での暮らしには、生き物への興味と観察を通しての人間力の維持と向上が求められる。山の暮らしには、体力と人間力を意識せざる得ない機会が、より多いことに気がついた。これが、山の教示だ。

◆あときは・・・浜通りの空は青く、よく晴れていた。気持ちに余裕がなかったのか、あとは冬枯れの景色ぐらしか思い出せないが、燃料半分の車で、会津までは行けるだろうと家を出た。

かみさんが勤務先の病院から電話をくれたのは、水素爆発からすでに五日経ってのことで、通りに出ると、すぐ近くの病院の前には自衛隊のバスやジープなど数台が並んでいて映画を見ているような光景だった。心配とか不安とかは頭になく、すでに大移動の終わったガラすき道路を走り、ともかく会津に着いた。三月末の会津、東山では雪解けが始まった道路わきにフキノトウが顔を出していた。投げ釣りをした砂浜、堤防もえぐられてしまった光景に息子の目はウルル

◆我が家へ・・・避難はしたものの、留守にした家が気がかりで満タン給油を機に原町へ戻る。小雪ちらつく会津から、季節はいつか春の息吹きが変わり、庭の手入れから、地震でずれた屋根瓦直しや防犯用センサーライトを取り付けたりしたが、店が開いてないので買い物するためには何度も相馬に出かけた。一段落して情報収集にと市役所に行ったら、地元住民が避難しているなか、全国からボランティアが応援に駆けつけてる現状を目の当たりにし、すでに支援物資のボランティアをしていた山仲間と共に、相馬までしか来ない宅配便受け取りを一カ月ほど続けた。その後、テレビでしか見ていない沿岸部の状況を「自分の目で見ておけ」と言っておいた東京の息子が、会社から特別休暇を貰ったと帰省したので、南は浪江・請戸地区(原発から8キロ)北は仙台空港まで、写真を撮りながら見てまわった。基礎だけの住居跡、防風林の松林は消え、子供のころ。

◆国見山へ・・・翌年、生涯学習センターで線量計の貸し出しを始めたので登山口の高倉ダムに向かった。モニタリングポストがあり、当時は $2.3\mu\text{SV}$ を表示していた。更に奥に向かい、農林課の許可を得たので通行止めチェーンの鍵を外し横川ダムに通じる国見山林道に入る。林道のほぼ中間で、国見山の沢コース登山道と交叉する。携帯線量計で $8\mu\text{SV}$ ほど。地表面の落ち葉の上では $10\mu\text{SV}$ を示した。昨年の測定では空間 $2\mu\text{SV}$ ほどになっている。国見山頂で $0.8\mu\text{SV}$ 。林道わきや登山コースはイノシシにかなり荒らされていた。



国見山より望む 中央は原町火発

◆消えゆく緑・・・何度か国見山に向かうのはトウホクサンショウウオの棲息地があるからで、線量測定は農林課に報告したためである。沢にいるハコネサンショウウオについては特に心配はないが、水の少ないクロサンショウウオの産卵地があぶないことになっている。それは除染によって表土を数センチはぎ取ることで補充土が必要になり、小高い山や斜面が削られている。平地になり、山砂が沢を塞ぐ。林が消えて幼生、成体共棲息に影響がでしまうので自然の早い復元力に期待するばかりである。

山だけではない。除染で屋敷林(いぐね)が伐られているし、作業のついでに庭木を切る人も多い。南相馬に限らず建築ラッシュで整地が進み、とりわけ復興住宅候補地では規模が大きく、街中からかなりの緑が消えている。今年の春、我が家の近くでチェーンソウの音が響き、何かと見に行くと湧水地の松林が伐られていた。市に保護を求めていたハンノキ数本も切られてしまった。水路は国有で市が管理だが、自然保護課のない南相馬。農林課、土木、都市計画などに保全を求めたが、理解を示したのは、松枯れが進んでの処置で宅地の予定はない、と言った地主でした。



伐採跡地と湿地。湧水路は右側の光る部分

◆放射能なんか・・・小幡さんの花粉症の記事を読んで、荒れ地が増えたせいなのか、私も震災後に夏限定だがカモガヤなどイネ科のアレルギーに。こっちの方が実に厄介なんです。

スミレの花が好きである。きっかけはやはり「高山の原生林を守る会」の観察会で、スミレには沢山の種類があり、それぞれに表情が違うことが分かったからだと思う。それまでは、スミレの存在は知っていたが、ひとまとめに「スミレ」でしかなかった。まず、ルーペを通してみる唇弁の美しい模様に驚いた。ひらひらと波打つ側弁、緩やかなカーブを描いて背筋を伸ばす上弁、スミレは作りそのものが美しく愛らしい。小さな芸術作品のようだ。見れば見るほど、神様はどうしてこのように美しい形や色をスミレに与えたのかと自然の不思議を感じる。

私の故郷の山である鹿狼山にも10種類を超えるスミレがある。3月末のアオイスミレの花に始まって、5月のニョイスミレの花で終わるまで、スミレの花の季節は続く。鹿狼山に「スミレの女王様」と言われるサクラスミレを見つけたときは嬉しかった。スミレは花が終わった後も閉鎖花を付けていたり、葉っぱだけは大きく成長を続けたりしているから、かなり長い間地面から消えないでいる。そんなことに気が付いたのもずっと後になってからである。

一昨年の6月末に秋田駒ヶ岳にタカネスミレを見に行った。高山の火山砂礫地にしっかり根を下ろし、コマクサと共に大群落をなしていた。そして、砂礫地でない黒土のところにはキバナノコマノツメが咲いていた。一緒に咲いているような場所もあったが、大方は棲み分けができていた。高嶺の花に出会う度、花が自分の適地を知って咲くことにも感動を覚える。

キバナノコマノツメと言えば、オーストリアのダッハシュタイン山脈を歩いたときも岩陰に楚々として咲いていた。どうしてこんなに遠く離れた地に同じ花が咲いているのかと感動したものだ。また、昨年ピレネー山脈を歩いたときも、このキバナノコマノツメに出会うことができた。本（[日本のスミレ]・いがりまさし）を読んだら「キバナノコマノツメは北極を中心に地球にグルリと鉢巻きをしたような地域に分布する。日本では北海道から屋久島まで分布し、一定の標高および緯度以上のところに普通に見られる」とあった。そうか、どんなに遠くても地球の鉢巻きの上だったんだ、と合点した。

アルプス山脈を歩いたときも今まで見たことのない紫色の大きいスミレに出会った。内田一也さんの「スイスアルプス花図鑑」でビオラ・ケニシア *Viola cenisia* とビオラ・カルカラタ *Viola calcarata* と分かった。名前は各国にそれぞれあるし、ドイツ語もフランス語も分からない私は、覚えるなら学名のラテン語で覚えた方が覚えやすいことも分かった。ラテン語はローマ字読みに近いので、私でも何とか発音でき、言葉になりそうである。しかし、図鑑というのはありがたいものだ。

ピレネー山脈でも素敵な水色のスミレに出会った。これはビオラ・コルヌタ *Viola cornuta* と分かった。麓の街の本屋に「ピレネー花ガイド」という本があったのである。スペイン語の本で説明書きは読んでも分からないが、花の写真があり、ラテン語の学名も書いてあったので、これで名前が分かった。

さて、下の写真は今年、アフリカに行ったときに熱帯雨林のジャングル中で見たスミレである。まず、スミレの花がまるっきり1本のツルの所々から出ていることに驚いた。花の感じはアカネスミレに似ていて上弁・側弁・唇弁や距もそろい、葉っぱは心形であった。1本のツルから、おおよそ等間隔に、花1つ葉1枚がセットになって直上していた。地面を四方八方に長く這い、草の上もお構いなしに這っていた。花と葉がセットになっている部分の下方には小さな突起が付いていたから、ここから根を出すものと思われた。ミヤマツボスミレなども茎が地表を這い、途中から根を出すらしいが、私はまだ確認していない。

「ふ〜ん、さすがアフリカだ」と、他にも珍しい花や樹木がいっぱいあって、感動の連続だった。街に出たら植物図鑑を買って、このスミレが何という名前なのかを調べようと思った。しかし、動物図鑑はあったが植物図鑑はなかった。ネットでも検索してみたがまだ不明である。自分の中で当面はアフリカツルスミレと名付けておこうと思う。(2015/08/30 記)



アフリカ・タンザニアの熱帯雨林
の中で咲いていたスミレ



「大震災が教えてくれたもの」(15) 奥田 博

待ちに待った！？原発再稼働～変わらない日本～

福島事故から4年足らずで川内原発が稼働を開始した。安全保障関連法案に目を奪われた絶妙なタイミングをうまく利用したものだ。ドサクサに紛れての再稼働ともいえる。2014年の都知事選では、小泉純一郎元総理が、細川護熙元総理を候補にして反原発を訴えた。しかし自民党が応援した舛添要一現都知事は原発問題を争点にすることを避けて圧勝。そして今夏、マスコミや世間の関心が安全保障関連法案に向かっている隙に、川内原発を再稼働させた。実に巧妙にしてしたたかな戦略。国民の70%は再稼働に反対しているという世論を無視したものだ。もっとも安全保障法案にしても60%が反対または拙速と感じていても通す。これが安倍流であることを認識すべきだ。戦争の責任や、明らかに人災である原発事故の責任も、当初は問題になっても、やがてうやむやにしてしまう国民性。あとは「忘れやすい国民」特性を生かして、ホトボリが冷めたころに選挙をやれば安泰なのだ。

福島原発事故を受けて、川内原発には新基準に基づく多くの防止策投資が行われた。新基準をクリア出来て、これは信じがたいが、万が一に事故が起きた場合の住民の避難に関しては、福島原発の事故前と何も変わっていない。起きたらどうやって避難させるか、具体性・実現性に乏しい。避難訓練で課題が見えても、それを放置する行政。世界一厳しい基準、電力需給逼迫、原発は安い、火山噴火予知可能そして万全な避難計画、どれも嘘で固めたとは元官僚の古賀茂明氏の言。

前福島県知事佐藤栄佐久氏の著書『知事抹殺～作られた福島県汚職事件』(原発事故前に出版されたところがスゴイ)の後に出た『日本劣化の正体』も悲しい面白さがある。その著で最後に二本松生まれの歴史家 朝河貫一が予見していた日本の姿・政治の姿がある。「原発事故調」の報告書の中で、委員長の黒川清氏は朝河貫一を引用して次のように書いている。「朝河は、日露戦争に勝利した後の日本国家のありように警鐘を鳴らす著『日本之禍機』を著し、日露戦争以後に『変わらなかった』日本が進んでいくであろう道を正確に予測していた。(今回の原発事故は)『変わらなかった』ことで起きた」。佐藤栄佐久氏は本著でこう結んでいる。「黒川委員長の指摘に、原子カムラの人たちが正面から向き合うことは、残念ながら、これからも決してないであろう。彼らは安全でない原発を安全だと言いくるめてきた人たちである。もともと原子カムラは、倫理観を喪失した人たちの集まる所である」。

佐藤栄佐久氏の有罪決定(賄賂はゼロだったが有罪という前代未聞の判決)を受けて、知事の退職金返還を要求した県。一方、前佐藤雄平知事は栄佐久知事が停めていた原発を稼働し、しかも危険なプルサーマルまで認可し、結果深刻な原発事故を招いたが、彼は退職金の返還は求められない。県民が大きな迷惑を被った事故の何とも腑に落ちない世の中だ。しかし国は憲法違反を承知で法律を通すご時世ですから、何が正しく、何が間違っているかを視る目が求められている。変わらない国は、変わらない国民が支えている。



原発が事故を起こした日、何も知らされないで給水車に並ぶ人々(左) 輸送トラックが福島県に入らずスーパーの棚から食料品が消えた(右) こんなことを繰り返してはならない。

ヒメイワショウブ (*Tofieldia okuboi* チシマゼキショウ科チシマゼキショウ属)

亜高山帯の湿地帯と砂礫地に植生する多年草。日本固有種である。安達太良山域には植生せず吾妻連峰の限られた山域に分布する。イワショウブとヒメイワショウブはユリ科チシマゼキショウ属に分類されていたが、DNA解析に基づく分類体系によりイワショウブはチシマゼキショウ科イワショウブ属として分けられた。イワショウブは4倍体で2倍体のヒメイワショウブと比べると草姿は大型である。イワショウブは吾妻連峰の高層湿原に植生し、植生地は明らかに離れている。

葉は根葉と茎葉に分かれる。葉は単面葉で、中肋に沿って表面が折りたたまれ裏面が外側に現れる。葉の縁には細かい突起がある。

花は頂性である。根生葉から花茎を伸ばし先端に総状花序を形成する。小花は1つの苞に1花着生する。これに対しイワショウブは3花咲かせるので苞に付く花の数を観察することでイワショウブとヒメイワショウブは識別できる。またイワショウブの花茎部には腺状突起があり粘るが、ヒメイワショウブは突起が無く滑らかである。花被片は緑白色で6枚、雄ずいも6個で、葯は黄色である(イワショウブの葯は赤紫)。雌しべの花柱は緑色で浅く3裂する。柱頭は白色透明である。

吾妻山の高山植物に興味を持ち20年以上、観察を続けているが、縁がないのか存在は知っていても花の時期に巡り合うことの無い植物が幾つかある。ヒメイワショウブもその一つであった。数年前に、終わりかけた花を着けたヒメイワショウブを1株だけ確認した。その後越後や蔵王山系でイワショウブの群落に度々遭遇したが、ヒメイワショウブを見かけることは無く、この植物が高山でも貴重な存在であることを認識した。幸いにして、本年、ようやく花が咲き揃ったヒメイワショウブの小群落に遭遇することができた。



ヒメイワショウブ



イワショウブ

チョウジギク (*Arnica montana* キク科ウサギギク属)

亜高山針葉樹林の湿原に点在する灌木帯に植生する多年草。日本固有種である。東吾妻山域と西吾妻山域の境界付近に隔離分布する。このような局在型の分布の仕方は、吾妻連峰の植物ではオヤマソバと似ている。分布域が日本海型の植物で会津や飯豊で確認されているが、安達太良山域では確認できていない。福島県では吾妻連峰が分布の東限かもしれない。ウサギギク属はキク科キオン族に分類され他の属とは葉が対生であることで区分されている。舌状花を持つウサギギクと舌状花をもたず筒状花のみのチョウジギクの2種で構成される。葉が対生であることを除けば、ウサギギクの外観はチョウジギクとの類似性は全く認められない。

葉は対生。1対の対生葉が地際部から90度回転しながら数段着生する(これを上から見ると十字に目えるので十字対生と言います)。葉は長楕円形。葉柄は無く葉身基部は鞘状になる、縁には粗い鋸歯がある。葉の両面はざらつく。



花は頂性。真っ直ぐ伸びた1本の茎の上部に散房状に長い花柄を分岐しそれぞれの花柄の先端に頭花を1花着生する。花柄には白く長い毛が密生する。頭花の筒状花は深い黄色で先端は4裂する。開花すると筒状花の中心から花柱が伸びる。柱頭は透明感のある黄色で2つに分かれ反転する。茶褐色の雄ずいが花柱の周りに癒着する。

かつて、吾妻山系の中に在って、独特の植生を見せる山域があり、集中的に通った時期があった。目的の花々の撮影に成功し、興味はヒカリゴケに移っていた頃に、予期せずチョウジギクに遭遇した。開花期はもっと後だろう思い込んでいた。端整に生えそろった白い毛をまとった花柄の様子が美しくも奇妙で、動物の様でもあり、人工的な装飾玩具のようでもある。多くのキク科の植物の中でも決して見間違ふことの無い、独特の魅力をもった個性派である。それ以来、出会うことは無かったが、17年ぶりに再会することができた。その時、心がときめいたのは心臓が弱くなったせいだったのだろうか。



第 142 回自然観察会案内:小野川不動滝周辺・秋の植物観察と芋煮会

日時:2015 年 10 月 4 日(日)7:30~16:30(開催日が 9/27 から変更になりました)

集合場所 四季の里正面入り口駐車場(あづま公園橋側) 7:30 参加定員 20 名

内容 小野川湖に流れ込む小野川に沿って整備された遊歩道を辿り、小野川不動滝を訪れます。滝の上流で芋煮会を開きます。

準備するもの 昼食、登山靴・長靴等、雨具、スパッツ類、防寒具、帽子、手袋(軍手複数)、着替、ゴミ袋、筆記用具、メモ帳、食器

*装備、その他不明な点があれば申し込み時にご相談下さい。参加費用:保険代(500 円)

申し込み:10 月 3 日(土)まで佐藤守(024-593-0188)へ電話またはメールにてお願いします(電話申込は午後 7 時~9 時でお願いします)。

西吾妻登山道誘導ロープ取り外しボランティア(NF 米沢と共同:詳細は佐藤守まで)

1. 実施日:10月17日(土)6時00分~17時30分(雨天時10月18日に順延)

2. 定員 :8 名(山岳での行動において自己管理のできる方)

3. 内容 :デコ平湿原駐車場から湿原を経由して西大巓に登り、西大巓山頂から西吾妻小屋までのロープ取り外し作業を行います。

4. 集合場所・時間:四季の里正面入り口駐車場 6時00分

5. 参加費 :0 円

6. 申し込み:佐藤守(024-593-0188)へ電話またはメール(全員返信モード)にてお願いします。(電話申込は午後 7 時~9 時でお願いします)

第 143 回自然観察会案内:女神山・里山の陽だまり観察会と総会

日時:2015 年 11 月 29 日(日)7:30~16:30

集合場所 小鳥の森第一駐車場 7:30 参加定員 20 名

内容 16 年ぶりに女神山を散策します。16 年前は女神山で町おこしが盛んでした。その後の女神山の自然の変化を観察します。午後は総会です。

準備するもの 昼食、登山靴・長靴等、雨具、スパッツ類、防寒具、帽子、手袋(軍手複数)、着替、ゴミ袋、筆記用具、メモ帳

*装備、その他不明な点があれば申し込み時にご相談下さい。参加費用:保険代(500 円)

申し込み:7 月 11 日(土)まで佐藤守(024-593-0188)へ電話またはメールにてお願いします(電話申込は午後 7 時~9 時でお願いします)。

第 36 回東北自然保護の集い・福島集會

1. 日 時 : 2015 年 11 月 14 日~ 15 日(土~ 日曜日)

2. 場 所 : 福島県郡山市大槻町字西勝の本 38- 1 「郡山温泉」 TEL 024-951-1231

テーマ 「原発事故に伴う放射能汚染と再生可能エネルギー開発を考える」

3. 主 催 : 東北自然保護団体連絡会。「第 36 回東北自然保護の集い」福島大会実行委員会

4. 参加費 : A 集いのみ参加 1,000 円 B 集い&懇親会 5,000 円 C 宿泊込み 10,000 円

5. 申込期限:10 月 20 日(参加希望者は佐藤 守まで)

「放射能汚染汚泥の仮置き場・設置計画(吾妻山)」の中止を求める署名依頼をいただいております。署名用紙が必要な方は佐藤守までご連絡をお願いします。なお、142 回観察会時に署名用紙を準備いたします。

新年度の会費納入をお願いします:郵便振替 02170-0-24351 「高山の原生林を守る会」へ

「高山」高山の原生林を守る会会報 第94号 2015年9月発行

編集・発行 : 高山の原生林を守る会 HP:<http://www15.plala.or.jp/adumatakayama/index.htm>

代表連絡先 : 佐藤 守 Phone 024-593-0188(夜間7時~9時)

郵便振替 : 02170-0-24351 「高山の原生林を守る会」

入会方法 : 年会費(500円)を添えて上記まで

編 集 : 佐藤・奥田・鈴木